

中央に發生して文化と共に四邊に流れて行くに従い次第に遠方に比較的變形を受けずに到達する。その頃には中央にはもう別の名が（同一系統のこともあれば別系統のこともある。この場合は同一系統に屬する）出現して又前の名を追つて擴がつて行こうとしている。こんな場合には前者は後者に對し方言の位置を押しつけられてしまう。方言が古型を存する可能性があるのはこゝである。陸中と肥前とはこゝに扱つた資料に關しては最も末端で、しかも全く相反する方向にある地方である。信州と豊前、豊後との間よりはずつと遠い。そこで恐らく今知られている名の内ではショウブノキとソボとが最も原型を存するものであらう。この So 又は Syô からやがて Byô や Ryô や Jô が音の轉訛として發生したものであつて、従つて So や Syô より中央に近いところに分布しているのであると思われる。さてこんどはショウブノキとソバとが何を意味して付けられただらうかは今のところ證明がない。ショウブを菖蒲とすべき香氣はない。たゞ一つの可能性はソボがソバ即ち蕎麥から來たのではないかという推定が残る。ハタツモリを生じさせたあの花序に密集した小白花の群は樹上に群がるソバの花の聯想ではなからうか。はたしてそうだとするとこの名はソバムギ(稜+麥)を第一段階として出發したソバが第一次省略によつてソバとなり、ついでこの省略されたソバが第二段階の起點となつて出來たソバノキの第三例であることになる。第一は食用果實としてのソバに因むブナに對するソバノキであり、第二は花序の白色と形狀とに注目したソバに因むカナメモチに對するソバノキである。そしてこの同じく花容に因んでリョウブに對して與へられたソバノキが其の第三番目である。發生はブナのソバノキが最も古く、第二と第三とはそれよりは新らしいと思はれる。

○南伊豆の羊齒類 (倉田 悟) (Satoru KURATA: Noteworthy ferns from the southern part of Izu Peninsula.)

天城山を中心とした伊豆半島は羊齒類の好採集地として有名であるが、從來餘り採集家の出入りしなかつた賀茂郡の中、南天城國有林並びに其の附近、及び東京大學樹藝研究所用地の所在する南土村に於ける、東京大學農學部林學科植物學教室の職員・學生による最近の採集品の申から、著しい羊齒と其の産地を次に報告する。(學名の後の漢字は村名である)。

1. ヒノキシダ *Asplenium prolongatum* Hook. (仁科, 城東)
2. ホウビシダ *Asplenium unilaterale* Lam. (仁科, 上河津, 城東)
3. クルマシダ *Asplenium Wrightii* Eat. (仁科)
4. ミドリワラビ *Athyrium viridifrons* Makino (上河津)
5. イハヒトデ *Colysis elliptica* Ching (仁科, 南上)
6. ホホノカハシダ *Ctenitis shikokiana* H. Itô (仁科)
7. カツモウキノデ *Ctenitis subglandulosa* Ching (南上)
8. ミヤマノコギリシダ *Diplazium Mettenianum* C. Chr. (仁科, 南上)
9. コクモウクジャク *Diplazium virescens* Kunze (上河津)

10. ヌ カ イ タ チ シ ダ *Dryopteris gymnosora* C. Chr. (仁科)
11. ヌ カ イ タ チ シ ダ マ ガ ヒ *Dryopteris Labordei* C. Chr. var. *Simasakii* H. Itô (仁科)
12. ナ ガ バ ノ イ タ チ シ ダ *Dryopteris sparsa* O. Kuntze (仁科, 南上)
13. エ ダ ウ チ ホ ン グ ウ シ ダ *Lindsaya Chienii* Ching (仁科, 南上)
14. ヌ カ ボ シ ク リ ハ ラ ン *Microsorium Buergerianum* Ching (仁科 南上)
15. タ カ ノ ハ ウ ラ ボ シ *Phymatopsis Engleri* H. Itô (仁科)
16. ナ チ シ ダ *Pteris Wallichiana* Ag. var. *magna* Tagawa (城東)

トビシマクワンザウ (佐藤正己) (Masami SATO: How *Hemerocallis exaltata* came to be introduced to the New York Botanical Garden.)

山形縣鮎海郡の飛島は酒田港から約 38km の日本海に浮ぶ周囲僅かに 10km の小島であるが、小さい割合には固有植物や近くの本土には見られない植物があるので注目すべき所である。

この島には古くからクワンザウの 1 種が全島到る所に繁茂し、島人はその花を摘んで食用に供して居たらしい。天保年間に庄内藩の畫家佐藤海宇の畫いた「飛島圖繪」にも母と娘と連れ立つてこの花を摘んでゐる圖と、若い婦人が 2 人で海水で花を洗ひ大きな漬物桶に入れてゐる圖とがあり、よく當時の模様を示してゐる。現在では花は餘り利用されない様であるが、葉を刈取つてムシロやザウリを作り、水田の無いこの島ではワラの代用品にもなつてゐる。

この島には小泉源一博士 (1927 年) や牧野富太郎先生 (1931 年) を始めとして多數の植物學者が渡つて居られ、この植物は ニックロウキスゲ と同定されてゐた様である。然るに先年アメリカ留學から歸られた原寛博士から、飛島産のクワンザウがニューヨークの植物園に栽培されてゐて、それが *Hemerocallis exaltata* Stout として *Addisonia* 18: 37 (1934) に記載されたことを教へて戴いた。その和名は自然とその話の間にトビシマクワンザウとなつたので一應ここに記録する。

さてこの飛島産のクワンザウがアメリカに渡つたのは、1927 年頃 Stout 博士の下で、*Hemerocallis* 屬の細胞學を研究中の須佐寅三郎氏 (現在山形縣立農專講師) が、全世界のワスレグサ屬を蒐集してゐた同博士の依頼をうけて飛島村の村長に根莖を二、三十個送らせたと言ふのがその筋道で、同氏が嘗て飛島に渡り荒天の爲に滞在の止むなきに至りその折にクワンザウの花を食べさせられた思出を Stout 博士に語つたのがそのきつかけとなつたものの由である。

トビシマクワンザウはその種名が示す様に草丈が高くて 1m 内外に達し、葉心から高さ 1.1—1.3m に及ぶ 1 本の花莖を抜き頂に數個の花を生ずる。花蓋片は 6 枚でほぼ同形で長さ 5.5cm、幅は内片が 2cm、外片が 1.5cm ぐらゐである。果して獨立種として區別すべきものかどうかは、専門家の判定を待つこととして、取あえず日本海の孤島に咲くこの美しい植物のために貴重な誌面を割愛して戴いた。